

(いずれも口頭発表セッション).

- Hayashi, R. “The Demand and Supply of the Long Term Care for the Elderly in Asia”
- Fukuda, S. “Gender Role Division and Parity Progression in Japan: A Period Comparison of Population-Based Longitudinal Studies” (T. Kato との共同発表)
- Fukuda, S. “The Implications of Demographic Change for Asian Marriage Markets, 2010 – 2050” (Y. Cheng 他との共同発表)
- Nakagawa, M. “Living Arrangement, Local Care Facilities and Residential Mobility of the Elderly Population in Japan: A Multilevel Analysis”
- Suga, K. “Ethnic Differentials in Effects of 1st Marriage and Marital Fertility on Below Replacement Fertility in Singapore, 1980-2015: A Multistate Lifetable Analysis”

(中川雅貴 記)

第2回ソウル人口シンポジウム

ファイナンシャルニュース新聞と社団法人ソウル人口フォーラム、韓国バイオ協会の共催による第2回ソウル人口シンポジウムは、2018年7月12日、ソウル汝矣島のコンラッド・ホテルで開催された。第1回(2017年11月16日)には外国人パネリストとして、津谷典子・慶應義塾大学教授と陸傑華・北京大学教授が招聘されたが、今回は Thomas Fent ヴィトゲンシュタイン人口・グローバル人的資本センター(オーストリア) 研究員と筆者が招聘された。

午前中のセッションでは、まず曹成虎・韓国保健社会研究院副研究委員が「低出産と政策対応の日韓比較」に関する講演を行い、出生率低下の要因としては夫婦出生率低下より未婚化の方が重要だが、韓国の低出産対策は夫婦出生率向上に向けた施策に偏っていることを指摘した。Fent 博士は“Change of Family and Ultra-low Fertility”と題した講演で、マルチエージェント・モデルを用いて家族政策の出生促進効果を検証した。筆者は“Family and Demographic Changes in Eastern Asia”と題した講演で、出生力の文化決定論を提示し、日本の移民政策の動向について説明した。引き続きパネル討論が、趙成漢・中央大学教授の司会で、朴京淑・ソウル大学校教授をコメンテータに迎えて行われた。

午後のセッションでは金ジンウク・西江大学校教授が「家族における男性役割の再構築」、申ギョンア・翰林大学校教授が「韓国の低出産対策のジェンダリズム」について講演し、李ジョンジム・女性家族部政策官と金テホァン・東亜大学校教授をパネリストに迎え討論が行われた。Fent 博士と筆者も最後まで会場に残り、コメントを述べてシンポジウムを終了した。(鈴木 透 記)

国際社会学会第19回世界社会学会議

“Power, Violence, and Justice: Reflections, Responses, Responsibilities”と題した国際社会学会(International Sociological Association)第19回世界社会学会議が、7月15日から7月21日の間トロントで開催された。

国際社会学会は57の Research Committee (RC) からなる大きな組織であるが、なかでも世界社会学会議は4年に1度開催されるもっとも大規模な会である。今回は全世界から5,000人以上が参加

し、日本からも多くの研究者が出席した。

当研究所からは、釜野さおり人口動向研究部室長と筆者が参加した。釜野室長は Diana Khor 法政大学グローバル教養学部教授、Denise Tang 香港大学社会学部教授とともに“Legal Recognition of Same-Sex Partnership and Kin Relations”と題した RC32 (Women in Society) と RC06 (Family Research) との共催セッションを企画し、また自身たちも“Experiences of and Ideas on Same-sex Partnership Certificate in Shibuya-ward, Tokyo” (Kamano, Kamiya, Sugiura & Taniguchi) ならびに“Same-Sex Partners and Practices of Familial Intimacy” (Khor & Kamano) というタイトルで報告を行った。筆者は、RC19 (Sociology of Poverty, Social Welfare and Social Policy) の“Intergenerational Relations and the Welfare State”というセッションで、当研究所の「生活と支え合いに関する調査」(2012年)のデータを用い、“Who Become ‘Double Carer’ in Japan?: Quantitative Analysis Using the National Survey on Social Security and People’s Life”と題した報告を行った。

人口問題関連では、RC41 (Sociology of Population) において”Population and Health of the Disadvantaged People”, “Demography of the Lgbt Populations”, “The Demography of the New Family”といった、非常に興味深いセッションが多数開催されていた。また、社会保障や社会福祉に関しても、各国の研究者間で問題関心が共有されており、今後の制度のあり方について活発な意見交換が行われていた。

上述の通り、今回の会議は権力、暴力、正義を全体のテーマとしていたが、報告者個人としては、「途上国」と呼ばれる社会における女性に対する暴力についての報告が特に印象に残った。

(藤間公太 記)